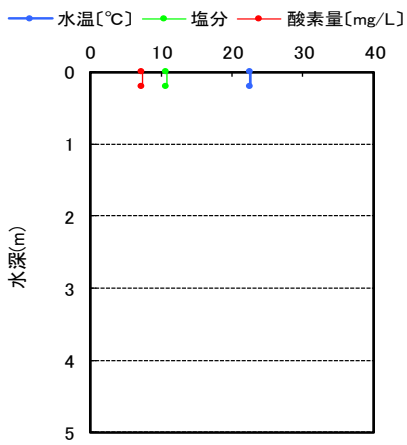
平成30年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	多摩川河口干潟	調査年月日	平成30年5月29日　8:40　～　9:40

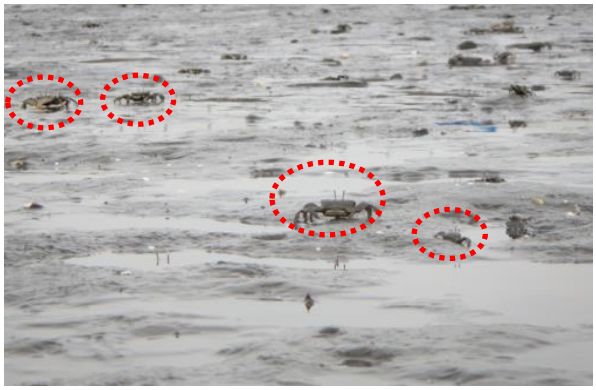
＜調査地点＞



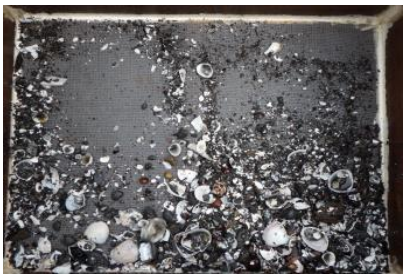
＜底質状況、底生生物出現状況＞

多摩川左岸側（東京都側）の海老取川河口付近の干潟で調査を行った。

底質はシルト（柔らかい泥）が混じった砂であり、臭いはなかった。



干潮時、じっと息をひそめて観察していると、多数のヤマトオサガニが巣穴から出てきた。



フルイに残った試料。貝殻片が多く混じっていた。

多摩川河口干潟では、様々な大きさのヤマトシジミが採取された。稚貝もみられ、稚貝の新規加入が起こっていることを確認できた。

殻長5cm程度になる。淡水の影響の強い干潟の砂底から砂泥底にやや深く潜って生活する。殻は白色半透明で、非常に薄く壊れやすい。

＜周辺の状況＞

甲幅4cm程度になる。柔らかい水分の多い泥干潟に斜めの穴を掘って巣穴を作る。巣穴の入り口には放射状の浅い溝ができる。

甲幅1cm程度になる。岸寄りの砂地に巣穴を掘って生活している。餌をとった残りの砂を小さな砂団子に丸めて巣穴の周りに並べる。

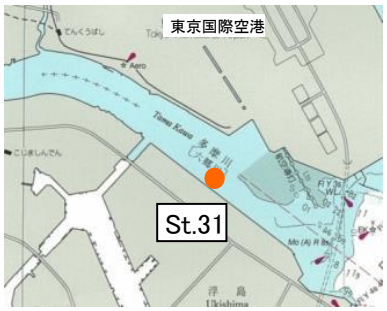
砂泥干潟や浅瀬の海底に潜り、細い糸のような鰓と触手を水中に伸ばしていることが多い。名前の由来は鰓と触手を水引（祝儀袋等に用いられる飾り）に見立てたもの。

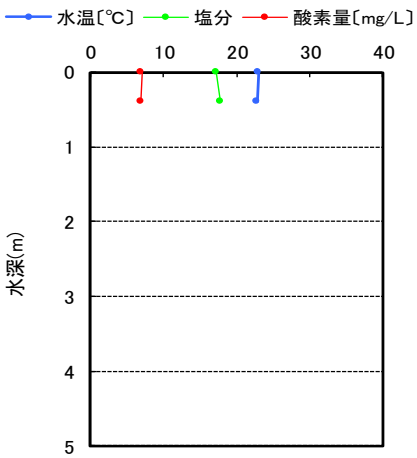
平成30年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.31(多摩川河口)	調査年月日	平成30年5月29日　9:49　～　10:33

＜調査地点＞





＜底質状況、底生生物出現状況＞

多摩川河口から1.5km付近の浅場であり、干潮時には川の中に立ち込むことができる。調査時の水深は70cmであった。

底質はシルト混じりの細砂で、臭いはなかった。

フルイに残った試料。砂のほとんどはフルイの目合(1mm)を抜けてしまい、貝殻片が残る。

体長9cm程度になる。砂質から砂泥質の干潟に2mにも達する巣穴を掘り、その中で生活する。江戸川河口では、食用にするため採取している人もいる。
幼体がまとまって採取され、まさにアナジャコ天国!?

殻長2cm程度になる。低潮帯の泥底から潮下帯のアマモ場周辺の砂泥底に生息する。各地で個体数は減少しており、環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種に選定されている。

殻長4cm程度になる。潮干狩りなどで盛んに獲られている代表的な二枚貝。東京湾のものは形が細くて、模様のコントラストが強いものが多い。稚貝のみ採取された。

殻長5cm程度になる。淡水の影響の強い干潟の砂底から砂泥底にやや深く潜って生活する。殻は白色半透明で、非常に薄く壊れやすい。

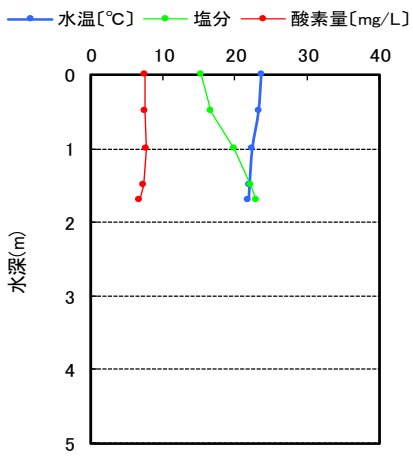
甲幅2cm程度になる。内湾泥底域のゴカイ類の棲管の中で生活していると考えられている。

平成30年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	森ヶ崎の鼻	調査年月日	平成30年5月29日　11:10　～　12:05

＜調査地点＞



＜底質状況、底生生物出現状況＞

羽田空港の北側に残された干潟。干潮時でも周りは「海」に取り囲まれているため、歩いて入ることはできない。

採取地点の底質は細砂であり、シルトは含まれていなかった。

春の大潮の干潮時には、普段見ることのできない広大な干潟が出現する。

フルイに残った試料。貝殻片が多く混じっていた。

殻長7cm程度の大型の個体が採取された（殻長は10cmを超える）。北米原産の外来種で、東京湾の湾奥の泥底やカキ礁周辺では多くみられる。食用となる。

殻長4cm程度になる。河口干潟など淡水の影響の強い、砂底から泥底に生息する。日本産シジミ類で最も普通に食用されているシジミである。

大きいのもので体長15cm程度になる。4つの鋭い牙（顎）がついた吻（ふん）を『チロリ』と出して、干潟の小動物を捕らえる。シロギス釣りの餌として珍重される。

甲長1cm程度になる。東京湾の干潟では、普通にみられるヤドカリである。潮間帯から浅海域にかけて生息する。『海の掃除屋』的な役割も果たしている。

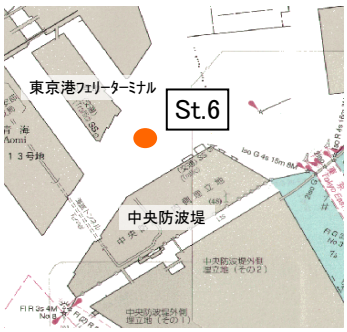
細長い筒型の特徴的な形状をした二枚貝で、大きい個体では殻長10cmを超える。生きている貝は、砂底に30cm以上深く潜っている。

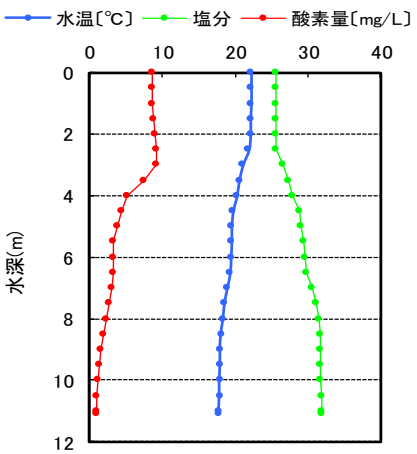
平成30年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.6	調査年月日	平成30年5月29日　12:20　～　13:11

＜調査地点＞





＜底質状況、底生生物出現状況＞

東京港フェリーターミナルの正面で採泥。航路であるため、水深は12.1mと深い。海底付近の酸素量は1.0mg/Lと貧酸素状態（2.0mg/L以下）となっていた。

フルイに残った試料。貝殻片が僅かに残る程度。

底質の性状は、シルトであった。海底面は、酸素があるため、表面の泥は灰色であったが、泥の中は、酸素が少ないため、黒色であった（還元状態）。

水深が深く、海底が軟泥であるため、軽めで取り回しのよい採泥器を使用。底泥が満杯で上がってくる。

体長20cm以上になる大型のゴカイ類。東京湾の泥底～砂泥底では、貧酸素状態の期間を除き、普通にみられる。

小型のチロリ属が採取された。調査点は夏季は無酸素状態になるため、貧酸素耐性を持たないと考えられるチロリ属には生息しにくい場所と考えられる。

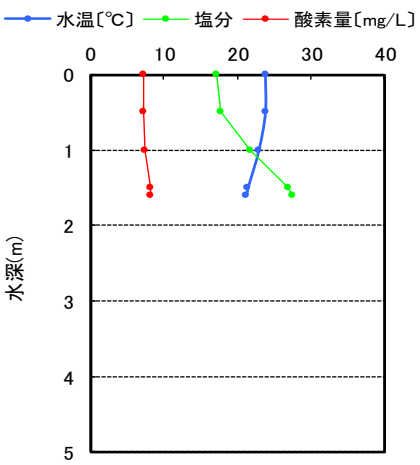
どちらも外来種で、東京湾では代表的な付着生物である。ムラサキイガイは、港湾の防波堤等に高密度に付着し、コウロエンカワヒバリガイはムラサキイガイよりも淡水の影響の強い場所に生息する。調査地点にこれらが生息していたかどうかは不明である。

平成30年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

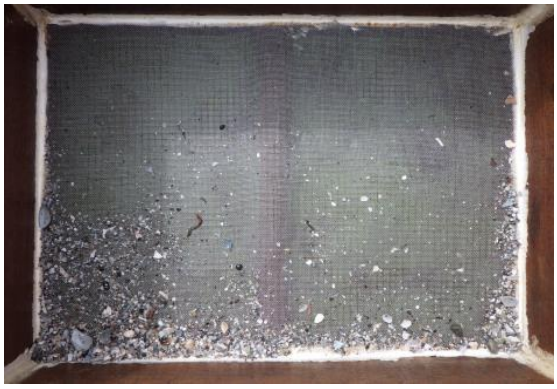
地点名	三枚洲（荒川河口）	調査年月日	平成30年5月29日　13:32　～　14:18

＜調査地点＞



＜底質状況、底生生物出現状況＞

荒川と旧江戸川の河口に残された天然の浅場。調査時の水深は2.6mあり、大潮の干潮時でも干出しない。
すぐ横は、東京ディズニーリゾートである。



フルイに残った試料。貝殻片が僅かに残る程度。

水深が浅く、海底の表面が固いため、重量のある採泥器を使用。それでも、1回に採取できる底土は、軟泥の地点に比べて少ない。

底質は細砂で、シルト（柔らかい泥）はほとんど混じっていなかった。水深が浅く、海底の表面が固いので、採泥作業は一苦労である。

底土をふるっている状況。細砂のため、あっという間に1mm目合いの網目を抜けてしまう。

3対の鰓がある。ハネエラスピオの仲間は日本では4種類が知られ、本調査ではこれまでシノブハネエラスピオとスベスベハネエラスピオの2種類が採取されている。

マテガイの水管は輪が重なったようになっていて、刺激を受けると容易に自切する。この水管は魚類の餌にもなっている。

汽水域に生息するアミの仲間（エビの仲間でない）である。体長10mm程の透き通った体を持つ。魚類などの餌として重要である